

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



にぎやかに踊りの練習をする石巻市大街道地区の「たんぼぼ会」の例会

## 特集

# エンタメだヨ! 全員集合

- 踊りで、自分も地域も元気に! ③  
たんぼぼ会 (宮城県石巻市)
- 災害公営住宅を核に地域活性化 ⑤  
七日町中央通り商店街振興組合 (宮城県大崎市)
- 笑いが支える心と暮らし ⑦  
素人演芸ひとり座「おだずもっこ〜ズ」(宮城県仙台市)

### ☆専門家に聞く地域づくりのヒント

(東北学院大学経済学部共生社会経済学科 准教授 齊藤 康則さん)

### まじわる災害公営住宅 ⑦ ⑨

鹿野復興公営住宅 (宮城県仙台市太白区)

### まちの仕組み ⑩

地域住民主体の見守りと交流で被災者を支援 (宮城県涌谷町)

### 私の地域の元気興し「S-1グランプリ第2回いがす大賞」 ① ⑫

大平北部ネットワーク (福島県二本松市)

### 東北の元気 ⑭

社会福祉法人一関市社会福祉協議会 (岩手県一関市) ⑭

### 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

### 場の力 ⑰ ⑱

集いから生まれる活力  
栃木避難者母の会 (栃木県)

- ・読者の声
- ・購読者を募集しています!
- ・次号予告

特集

# エンタメだヨ! 全員集合

娯楽でつくる笑顔と交流

娯楽や趣味は、人の心を明るく、前向きに、開放的にします。

楽しい時間の共有は、新しい人づきあいへの扉を開いてくれます。

歌謡、演芸、アート、コンサート、ダンス、スポーツなどに取り組む・観賞する、

美容や健康、趣味、教養の講座やサークルに参加する、

旅行、映画、エステ、時には買いものや散歩、食事に出かけることだって、

私たちの心を浮き立たせるすてきなエンターテインメントになりますね。

仮設住宅や災害公営住宅の集会所で行われた楽しい余興、趣味や娯楽の催しが、

そこに居合わせた人の心を和ませ、会話を弾ませるきっかけとなる場面を、

私たちは何度も何度も見てきました。

仮設住宅、災害公営住宅の入居者同士や地域住民との交流づくりに、

エンタメがうまく生かされている事例を改めて紹介したいと思います。

さあ、笑顔と交流を生み出すエンターテイナーたちの登場です。



**DATA**  
**たんぽぽ会**  
 活動先：上大二会館（宮城県石巻市築山1-31-3）



「S-1 グランプリ第2回いがす大賞」の舞台にもぎやかに！

# 踊りで、自分も地域も元気に！

◎たんぽぽ会（宮城県石巻市）

## ポイント

- 自分のできることをして、自ら楽しみ、心の拠りどころに。
- 活動をとおして、地域を元気にし、仲間を生み出す。

平均年齢は88歳

毎週火曜日、石巻市大街道地区にある上大二会館の2階から、にぎやかな声が聞こえてくる。13時〜16時まで、「たんぽぽ会」の女性10人が集い、手づくりの漬物やおかずを持ち寄って、おしゃべりをしながら、踊りの練習に励む。「これ、おいしいね」「どうやったら上手くつくれるの？」という会話から、「あそこに住った復興公営住宅を見てきたよ」という旬の情報まで、話は途切れることがない。そうしている間も、石巻市社会福祉協議会や地域の活動者がひっきりなしに訪れ、そのたびに話題があちこちに飛びつつ、「〇月〇日にお手伝いすればいいのね」と着々と物事が決まってく。地域の人から親われ、頼られる存在であることを感じる。

14時半をすぎると、それまでのお茶のみから一転、踊りの練習に切り替わる。自分たちで振り付けしたというレパートリーは、20曲。人気ロックバンド「くるり」が石巻の仮設住宅に暮



あれこれ持ち寄り、お茶を囲んで談笑。笑顔が弾ける

らす人たちの言葉をもとにつくった「石巻復興節」をはじめ、民謡や演歌、歌謡曲まで幅広い。次の訪問先の発表演目を話し合ってから7〜8曲を選び出し、その演目に沿って、本番さながらに40分間ぶっ続けて踊り続ける。曲にあわせて衣装や小道具を変え、飛び跳ねたり、回ったりとかなりの運動量。踊りを覚える以上に、体力も相当に必要だ。「疲れた！」と汗を拭きながらも、その顔は晴れ晴れと笑顔。そうして16時前になると、あうんの呼吸で片付けと掃除を済ませ、「また来週！」とさっそうと帰っていく。

メンバーの平均年齢は88



## たんぽぽ会

代表 村田 初恵さん

「みんなもやらいん！小さな輪が大きな輪になっから」

歳。これが「たんぽぽ会」の日常だ。

### 自分も楽しむ活動

メンバーの多くが暮らす大街道地区は、津波により大きな被害を受けた。身内を失ったメンバーもいる。リフォームした自宅で見ながら暮らす仲間たちを見て、「いつまでも泣いてばかりいられない。自分たちのできることをして自分も楽しみ、たくさんの笑顔を取り戻す活動をしよう」と、代表の村田初恵さんが周囲に呼びかけ、会を立ち上げた。

以前から踊りが好きで、町内会のイベントの余興などでも自分たちで振り付けをして仲間と踊っていた村田さん。久々に集まり、久々にバカ笑いをしながら体を動かすことで、メンバーたちも自分の心と体がほぐれていくのを感じた。地元の公民館である上大二会館が再建されるまで、一般社団法人BIGUP石巻が大街道地区の民家を活用して運営する「街の駅たんぽぽの家」で練習していたこと

から、会の名称は自然に「たんぽぽ会」と決まった。

そして復興支援を行うさまざまな団体と知り合い、仮設住宅での盆踊りを応援したり、地域の歌に踊りをつけて披露するなかで、自分たちの踊りでたくさんの笑顔が生まれることがうれしく、生きがいになってきた。赤い羽根共同募金の助成金を得た2012年秋からは、小道具や衣装を少しずつ揃えることができ、活動が活発に。地域の70〜80歳代の人を対象にした「高齢者のつどい」を企画したときには、約40人の参加者とともに昼食と踊りを楽しんだ。

いまでは、地元のデイサービス事業所や地域のイベントに呼ばれることが増え、年間50回のステージ活動をこなすまでに成長。年配のメンバーはマネージャーとして、衣装替えを担当する役目を担う。

### すべてユーモアに包んで

週1回の例会は、とにかく笑いが絶えない。「家になれば一日テレビ。ここに

来るのが楽しい」「たんぽぽに行く、という大家族は何も言わない」とメンバーは微笑む。踊り以外に手芸を楽しむこともある。

「家の用事はぶん投げてでも、ここには必ず来る！」と誰かが言えば、「オレたち、百歳まで生きっぺし」「這ってでもこの2階に上がってくる！」「でもトイレは1階だから、また降りなきゃならない(笑)」と大笑い。

震災時、必死に木につかまって助かったこと。浸水した自宅の床下に入って、重いヘッドロを掻き出したこと。つらい、悲しい話題もすべてユーモアに包んで、みんなで笑い合う。たんぽぽ会はいまや、メンバーにとって生活になくてはならない心の拠りどころとなっている。

### 地域に目配り

メンバーには、現役の民生委員が2人いる。元民生委員や元婦人部長もいるたんぽぽ会は、「地域に目配りし、必要なことを探し出してその担い手を発掘し、

育てるのが上手」と、石巻市社協・地域福祉コーディネーターの鈴木麻千子さんは評する。たとえば、「高齢者のつどい」は、昨年から主催を別の団体に渡しつつ、自分たちも参画して場の盛り上げ役に徹している。地域では、健康体操やダンベル体操に興味のある人たちを誘い、次々とグループ化して活動を独立させてきた。そのプロセスにおける、つかず離れずの距離感が「絶妙」と鈴木さんは話す。いま村田さんたちは、家にこもりがちな男性の存在が気になっている。「囲碁や麻雀のできる大人の社交場をつくりたいね」と、たんぽぽ会でも話題が弾む。

今年2月には、被災地の支え合いの芽を発掘し、称え合う「S・1グランプリ第2回いがす大賞」(詳細は12頁参照)の最終選考会で踊りを披露し、「のさる賞」を受賞した。

「みんなもやらいん！小さな輪が大きな輪になっから」というたんぽぽ会の呼びかけに、次はあなたが応える番だ。 **小**



七日町災害公営住宅の広場と集会所（写真奥）で開かれた交流イベント「なないるデー」

**DATA**

なのかまち  
七日町中央通り商店街振興組合  
佐々木愛一代表理事  
〒989-6153  
宮城県大崎市古川七日町8-42  
TEL 0229-22-4145  
FAX 0229-22-1484

## 災害公営住宅を核に地域活性化

◎七日町災害興公営住宅 / 七日町中央通り商店街（宮城県大崎市古川）

### ポイント

- 商店街と地域の活性化策に、災害公営住宅の入居者支援を組み込んだ。
- 災害公営住宅の立地は地域おこしのチャンス！

七日町中央通り商店街は、大崎市役所本庁舎（古川七日町1-1）から東側へ延びる目抜き通りに沿って、衣料品店や飲食店など約50店が営業。県北全域から買いもの客が訪れた往時のにぎわいは、すでに失われている。郊外大規模店の進出、核店舗だった総合スーパーの廃業、人口減などにより、この30年ほどで

商店街の真ん中に災害公営住宅——これを機に地域全体の活性化を図る取り組みが、宮城県大崎市古川の中心市街地、七日町地区で始まった。災害公営住宅の敷地と集会所で、生鮮品の屋外販売、コンサート、美容・健康・趣味・教養などの講座を組み合わせたイベントが定期開催される。2月17日に開かれた第1回のイベントには、入居者をはじめ周辺から多くの住民が集まった。入居者と地域住民の交流やコミュニティづくりが、衰退の危機に直面する商店街の再生とセットで進められようとしている。

空洞化が進んだ。震災後は、被災した店の閉鎖・撤退に加え、集客要素のひとつだった市立病院の郊外への移転が重なり、衰退に拍車が掛かった。商店街を含む一帯はビジネス街で、周辺地域に比べ住居が少ない。七日町町内会の加入世帯数は、65世帯ほど。そこへ、市内の被災者や沿岸部からの避難者30世帯が、災害公営住宅の住人として転入する。

災害公営住宅は、商店街のほぼ中心に位置する。鉄筋コンクリート5階建て30戸で、昨年末までに完成、今年1月入居が始まった。取材を行った2月17日時点で、10世帯が引っ越しを終えた。以降、徐々に入居が進む見通し。



集会所でのワークショップ（ハンドクリームづくりの様子）



七日町中央通り  
商店街振興組合

佐々木 愛一さん

講師ギルド  
Powerful Woman

東 順子さん

「この取り組みをモデル化し全国に発信したい」(東順子さん)

「災害公営住宅の立地を機に、まち全体の魅力高める」(佐々木愛一さん)

七日町中央通り商店街振興組合は、災害公営住宅を商店街再生の起爆剤と位置づける。その立地に合わせ、商店街を従来のビジネス街隣接・広域商圈型から、居住ゾーン隣接・地域密着型へと脱皮させる方針だ。日常的な買い物環境の充実を図り、見守りや交流といった地域福祉的な視点も取り入れた娯楽や趣味の機会を、災害公営住宅の集会所や広場を活用し創出する。具体的な計画の策定は、昨年末までに終了。いよいよ実施段階に入る。

2月17日朝。七日町災害公営住宅の通りに面した「ふれあい広場」と集会所に、「七日町テラス・ならないろデー」と大書きしたのぼりがひるがえった。「七日町テラス」は、振興組合による商店街再生のプロジェクト名。「ならないろデー」は、広場と集会所で開かれるイベントの名称で、七日町にちなみ7種類の催しが用意される。同日が初開催で、以降毎月17日をなないろデーとし、継続していく。

広場には仮設テントが建

ち、休憩用のイスとテーブル、暖を取るストーブが用意された。また、新鮮な野菜や水産物、総菜、漬けものなどを積んだバンタイプバンタイプの軽自動車などが11台並び、荷室を開けて即席の売り場とした。

開会時間の午前10時。気温5度を下回る寒さのなか、平日にもかかわらず、次々と来場者が詰めかける。はじめは高齢者が目立ち、1時間ほどすると子連れの若い母親が多くなってきた。ほとんどは周辺の住民だが、災害公営住宅から出てきた入居者と思しき人影も混じる。

同居宅でひとり暮らしの女性(82歳)に感想を聞くと、満面の笑みを浮かべて「地域の皆さんの歓迎の気持ちが伝わってきました。すばらしいところに引っ越すことができました。こういうのがずっと続くといい」と話してくれた。2年前に脳梗塞を患い、歩行がやや不自由だが、にぎやかな様子につられて外に出てきた

という。両手はすでに、野菜や総菜の入った買いもの袋でいっぱいだった。

集会所では、スイーツやハンドクリームづくり、ヨガなど5種類の講座と、サックス奏者によるコンサートが開かれた。

集会所は、鉄骨造平屋建て、床面積約100㎡。通りと広場に面した壁面は、なんとガラス張りだ。集会所や広場の構造は、周辺地域も含めたコミュニティづくりを設計当初から意識したものとなっている。通りからは、イベントの様子がよく見える。たまたま通りがかって、立ち寄る人も多かった。

各種講座は、テーブルごとに開かれる5人前後の少人数制で、入居者同士や地



サックス奏者のライブコンサート

域住民が知り合う場ともなった。運営は、女性33人が加盟する講師ギルド「Powerful Woman」(パワフル・ウーマン)(事務局・宮城県美里町)が担当する。

ギルド代表の東順子さんは、「商店街活性化や地域コミュニティの再生は、全国的な課題。この取り組みを成功させ、モデルとして発信したい」と意気込む。

商店街振興組合の代表理事・佐々木愛一さんは、「補助金に頼らず継続できるように、物販や講座運営ではきちんと利益を出せるようにしたい。まち全体の魅力を高め、人を呼び込めるようにする」と抱負を語った。

このほか、「宮城のこせがれネットワーク」やNPO法人おおさき地域創造研究会など、地元で活動する複数の地域づくり団体が連携・協力し、同居宅でのイベントやサロンに取り組み。

災害公営住宅の入居者支援と地域づくり、商店街再生の組み合わせが、どう発展していくか、今後の推移を見守りたい。

木



自前の衣装と小道具で七福神のように！

**DATA**

**素人演芸ひとり座  
「おだずもっこ〜ズ」**

座長 あっべとっぺの助  
山崎 孜（よこし）

宮城県仙台市宮城野区五輪2-11-12  
TEL 090-1933-7139

## 笑いが支える心と暮らし

◎素人演芸ひとり座「おだずもっこ〜ズ」（宮城県仙台市）

### ポイント

- 「笑い」で個人の気分も集団の雰囲気も明るく！
- 笑いや芸によって人と人がつながる！

宮城県仙台市を中心に、仮設住宅の集会所などを笑いで沸かせる素人芸人がいる。素人演芸ひとり座「おだずもっこ〜ズ」座長あっべとっぺの助こと、山崎孜（よこし）さんだ。

「おだずもっこ」とは、宮城の方言で「ふざける人」「お調子者」のこと。芸名にある「あっぺとっぺ」は、「あべこべ」なことを指す方言。劇団名のとおり、「素人演芸ひとり座」は座長の山崎さんのみ。山崎さんは定年退職後の2005年7月におだずもっこ〜ズを立ち上げ、素人芸人としての活動を開始。高齢者福祉施設や町内会、老人会の催しなどに赴き、ボランティア公演を行ってきた。東日本大震災後は、避難所や仮設住宅の集会所、被災地域の公民館などでも活動している。

演芸の内容は、歌、踊り、トーク、昔語りなど。平均公演時間は1時間。そのなかで、衣装替えを5回ほど行い、小道具や音楽などを用いて、次から次へとバリエーション

に富んだネタを披露する。特にお年寄りに楽しんでもらえるよう、歌謡曲や衣装にも昔ながらの懐かしいものが多い。

山崎さんは石巻市旧雄勝町の出身で、宮城のお年寄りの耳になじむ方言も用いて場を和ませる。

**被災地域にも笑いを**

東日本大震災の被害を大きく受けた人たちのために、初めて芸を披露したのは震災から間もない頃、避難所に使用されている学校でのことだった。体育館で演芸をするように依頼を受けた。

「避難している人たちは芸を楽しめる状況ではないだろう。演芸が場違いではないだろうか」。震えるほどの不安を抱きながら公演に踏み切った。何百人もの避難者を前に公演し、終わってみれば大盛況。「人はみんな楽しいところに身を置きたいのだなあ」と笑いの大切さを改めて感じた。

その後、被災した人たちの笑顔づくりのために

30回以上の公演を行ってきた。高齢者福祉施設などでは、観客はたいいてい20〜30人ほどだが、旧雄勝町にある公民館での公演には60人も人が集まった。

芸をするだけでなく、災害公営住宅の入居者向けの交流会で山崎さんが司会を務めることもある。入居者どうしが親交を深めるために集まっても、司会がかしこまってはそその場の空気も堅くなってしまう。わきあいあいとした和やかな雰囲気をつくるために、山崎さんは会の進行をしな

がら、参加者を笑わせるトークも織り交ぜる。「復興公営住宅は、知らない人どうしが一つ屋根の下の生活を送るようなもの。交流をサポートする役割が必要」。山崎さんは、笑いの力を存分に使い、独自のスタイルで人と人との関係づくりも支えている。

**芸を通して個人を見つめる**

おだずもっこ〜ズの「ズ」は複数のものを指すが、そこには観客がいてこそ公演が成立するという思いが込められている。山崎さん一人ではなく、その場にいる人たちが全員が合わさって、おだずもっこ〜ズなのだ。公演中、山崎さんは観客との交流を図りながらネタを進める。客席に割って入り、スキンシップもとりながら距離を縮める。公演後には、一人ひとりと握手してまわる。手を握ると、観客が何を言おうとしているのかわかるような気がするという。

「震災によってぎりぎりまで追い詰められただろう人たちから、頑張って生きていこうという力強さを感じられる」。観客と向き合うことで、山崎さんが相手から受け取るものも多い。「公演中に倒れてもいから、死ぬまで演芸を継続したい。1人でも喜んでくれる人がいる限り、老骨に鞭を打つ」と語る山崎さん。芸風はおもしろおかしくふざけているように見えても、芸の道には真面目で真剣。「あつべとっぺ」な存在が、一人ひとりの心のなかを明るくし、明るい地域をつくるのに大きな役割を担っている。

「震災によってぎりぎりまで追い詰められただろう人たちから、頑張って生きていこうという力強さを感じられる」。観客と向き合うことで、山崎さんが相手から受け取るものも多い。「公演中に倒れてもいから、死ぬまで演芸を継続したい。1人でも喜んでくれる人がいる限り、老骨に鞭を打つ」と語る山崎さん。芸風はおもしろおかしくふざけているように見えても、芸の道には真面目で真剣。「あつべとっぺ」な存在が、一人ひとりの心のなかを明るくし、明るい地域をつくるのに大きな役割を担っている。

清

東北学院大学経済学部共生社会経済学科 准教授

齊藤 康則(さいとう・やすのり)さん

東京大学大学院人文社会系研究科博士後期課程単位取得退学。専攻は地域社会学、市民活動論。大分大学福祉科学研究センター講師などを経て、2012年4月より現職。東日本大震災では仙台市若林区「六郷・七郷コミネット」などの活動に関わる。論文に「復興支援活動から見た行政システムと市民社会の『災後』」(『震災学』6)など。



## 専門家に聞く地域づくりのヒント

### 「ポスト復興期」の関係づくりにおける、エンターテインメントの可能性

「エンタメだヨ！全員集合」という特集タイトルに、あるいは違和感を覚えた読者もいるかもしれません。しかし、この「エンターテインメント」という言葉には、文字通りの娯楽だけでなく、歓待(もてなし)という意味が含まれていることを、皆さんご存知でしょうか。かつて民俗学者の柳田國男は、笑いは「勇気また元気の源であり、同時に団体生活の親しみを養う力である」(『笑いの本願』)と述べたこともあります。

今回紹介された3つの事例はエンターテインメントをとおした自己と他者、そして人々と地域の関係づくりというテーマに共通性が見られます。応急仮設住宅から災害公営住宅へ、被災者の生活の場が移行しつつある現在、こうした観点からコミュニティのあり方を再考することも大切ではないでしょうか。

発災からの時間経過とともに被災地が(絶望から希望へ)向かうプロセスのなかに、3つの取り組みを位置づけ直してみると、どうなるでしょう。「おだずもっこ〜ズ」は「芸を楽しめるような状況ではない」時期に、被災した人々の「前向きな姿勢」を、外部の支援者が取り戻そうとする試みです。一方、七日町復興公営住宅の集会所で開かれるスイーツづくりなど趣味の講座は、「やってみよう」という参加者の意欲があることが前提条件です。

「たんぼぼ会」が手がける「高齢者のつどい」は、彼(女)ら自身が中心メンバーとして企画運営などを担っている点で、なお一層の主体性が求められていると言えます。

たしかに被災した人々は、時間経過とともに(受動から能動へ)気持ちを変容させていきます。しかし注意しなければならないのは、彼(女)らが同じように立ち上がるわけではない点です。言われるところの「復興のスピード」はその人の置かれた状況によって大きく異なります。被災者(より広い文脈では社会的弱者)の居場所づくりには、地域のなかに複数のステージに対応した、多様な活動が存在することが是非とも必要なのです。

今後の課題も残されています。阪神・淡路大震災以来、「孤独死」リスクの高さを指摘されてきた中高年男性の参加は、どうすれば図ることができるでしょうか。また、災害公営住宅の建設を活性化のチャンスと考える商店街は、生み出された事業を中長期にわたって持続することができるのでしょうか。私たちは今後の取り組みに注目していきたいと思います。

「地方創生」が叫ばれる今、地域資源を生かした地域固有のエンターテインメントと、人々の関係性を再構築するプロセスが、被災地であるか否かを問わず、求められているように思います。



高齢入居者向けの「かのサロン」（2月6日）



## 高齢者向けサロンを開催

鹿野復興公営住宅（宮城県仙台市太白区）



鹿野復興公営住宅（2棟70戸）

昨年7月に入居が始まり、住民交流や地元町内会への編入準備が進む鹿野復興公営住宅（2棟70戸、仙台市太白区鹿野本町）。  
 昨年は、2回にわたって交流会が催され（本紙30号に関連記事）、今年に入ってから高齢入居者向けの「かのサロン」が、2月6日と3月10日に相次いで開かれた。

初開催となった2月のサロンには、高齢者だけでなく、子ども連れの若い母親らも来場。支援者も含めると約50人が集まり、お茶やお菓子を味わいながら、気軽なおしゃべりを楽しんだ。区の保健師、地域包括支援センター職員、民生・児童委員らも出席し、健康や

生活に関する相談に応じた。ボランティアによるハンドマッサージもあった。同住宅の集会所が未完成のため、近隣の指定生活介護事業所（福祉作業所）「こぶし」を会場とした。

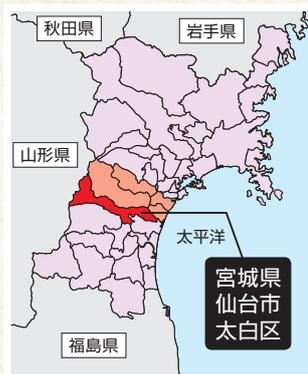
サロンに参加した松野昭次さん（71歳）は、「見知らぬ人の集まりだった復興公営住宅で、入居者が少しずつ打ち解け、仲良くなっていくのを実感している」と喜ぶ。松野さんは、住民活動のリーダー役として入居者のなかから選任された世話人の1人。今後、ほかの世話人や各階ごとの「フロア長」と協力し、入居者同士や地域との関係づくりを進める。

サロンを主催したのは、町内会や区役所、区と地区の社会福祉協議会、地区民生・児童委員協議会、地域包括支援センター、社会福祉法人などで構成する「鹿野復興公営住宅支援者連絡会議」。

連絡会議は、当面サロンを続けながら、徐々に入居者にも運営に参加してもらい、定着のメドが立った段階で、住民主体の運営に切

り替える考え。

連絡会議事務局を務める太白区社協のコミュニティー・ソーシヤル・ワーカー、大久保環さんは、「復興公営住宅の取り組みをきっかけに、地域全体がサロンなどによる支え合いや交流を進展させていけるようにしたい」と意気込む。入居者支援の取り組みが、地域づくりに



### DATA

#### 鹿野復興公営住宅支援者連絡会議

構成団体（名簿順）：鹿野地区連合町内会、鹿野町内会、鹿野地区社会福祉協議会、鹿野地区民生・児童委員協議会、日赤鹿野地区奉仕団、長町中学校避難所準備委員会、鹿野小学校避難所運営委員会、長町地域包括支援センター、社会福祉法人仙台市手をつなぐ育成会こぶし、太白区まちづくり推進課、太白区民生生活課、太白区保健福祉センター家庭健康課、仙台市社会福祉協議会中核支えあいセンター、太白区社会福祉協議会（＝連絡会議事務局）



まちの仕組み

宮城県涌谷町

30

# 地域住民主体の見守りと交流で 被災者を支援

## 宮城県涌谷町



宮城県涌谷町では、被災者支援のためのサポートセンターといった拠点や組織は設けられず、生活支援相談員も配置されていない。

被災者の見守りや相談といった個別支援は、民生・児童委員が中心となって活動する既存の「見守りネットワーク活動」が担っている。

災害公営住宅団地でのコミュニティ形成には、受け入れ地域の自治会が、主体的に取り組む。

### 既存の仕組みフル稼働

同町の被災者向け仮設住宅は、すべて賃貸住宅借り上げ方式の、いわゆるみなし仮設住宅（次ページ「まちデータ」参照）。沿岸部からの避難者が多く、ほとんどは町内に住む親類を頼って来ている。それでも孤立の懸念がないとは

言えず、既存の地域福祉や住民活動がフル稼働して対応に当たる。震災前から見守りやサロン、介護予防などが活発で、被災者支援の専門組織・人員に対するニーズを高めなかったことが、同町の特徴と言える。

「見守りネットワーク活動」は、町社会福祉協議会の呼びかけで、10年ほど前に町内各地区ごとに立ち上げられた。民生・児童委員（39人※各行政区に1人ずつ）、福祉推進員（257人）、健康推進員（318人）といった地域活動のリーダーや、自治会、地域福祉会（＝地区社協）、町社協、町役場関係各課などが連携する。計39の行政区単位で運用。住民が近所づきあいのなかで気づいたことを民生・児童委員へ知らせるといったことも、日常的に行われている。町に転居すれば、自然にネット

ワーク活動に取り込まれる。被災者も例外ではない。

高齢・障害者、心身の不調を訴えている人の独居や夫婦だけの世帯、困窮の懸念がある世帯など、生活課題を抱えている場合は、定期訪問の対象となる。

訪問活動の主軸となるのは、民生・児童委員だ。訪問は通常月1～2回で、生活課題が重い場合は頻度を上げたり、自治会役員や周辺住民との連絡を密にして対応する。高齢者の場合、原則70歳以上の独居や夫婦のみの世帯は、すべて訪問対象となる。

八雲区自治会（317世帯）を担当する民生・児童委員の青木貴子さんによると、同区内で訪問対象になっている被災者は、沿岸部出身で民間みなし仮設住宅に暮らす独居高齢者の1世帯。

「二期期精神的にだいたい

不安定で、訪問の回数を増やし傾聴も行いました。出身地に戻るか、こちらに定住するかずいぶん悩んだようです。結局こちらに定住することを決意し、この春災害公営住宅への入居を予定しています」（青木さん）

八雲区は、町内3か所（計48戸）の災害公営住宅団地のうち、28戸が建設され最大規模となる渋江団地（1戸建て16戸、長屋タイプ6棟12戸）が立地。この4月以降、入居が始まる。敷地内には、周辺住民との共用を前提とした集会所がある。

### 自治会同士で情報共有

八雲区自治会は、団地が地域から孤立しないよう、集会所の共同利用や地域行事を通じた交流に取り組む予定だ。早期に

同自治会のひとつの班として編入できるよう、住民自治の立ち上げ支援も行う方針。

具体策については、住宅団地3か所のうち最も早い昨年9月に入居開始となった六軒町裏団地（8戸、すべて1戸建て）の事例を参考にしたい考え。同団地がある5の2区自治会（267世帯）との情報交換を行いつつ、入居者との効果的な交流方法などについて検討を進



4月以降に入居が始まる渋江団地（1戸建てなど計28戸）の集会所。周辺住民と共用される

める。

同じく4月以降入居開始の中江南団地(12戸)「1戸建て8戸、長屋タイプ2棟4戸」が立地する日向自治会(175世帯)でも、八雲区同様の取り組みを予定している。日向区は従来、自治会が組織されており、行政区が住民自治を所管していた。災害公営住宅の立地をきっかけに、2月22日の住民総会で自治会設立を決定。これにより、防災・環境・教育・文化・健康・福祉など住民活動の分野

横断的な連携が密になり、入居者支援の態勢を取りやすくなると見られる。

同26日には、これら3地区の自治会役員や民生・児童委員ら住民リーダー8人が、災害公営住宅の受け入れに関する初の情報交換を行った。

会場は、社協事務局がある高齢者福祉複合施設「ゆうらいふ」内の会議室。

参加者は、八雲区の白岩文夫自治会長(行政区長)、相澤康夫副会長、青木貴子民生・児童委員、小野寺保見地域福祉会長、



災害公営住宅が立地する3地区の自治会役員らが、入居者の受け入れを巡って情報交換をするために集まった(高齢者福祉複合施設「ゆうらいふ」内)

5の2区の菊地三善行政区長、中澤弘自治会長、和泉光秋民生・児童委員、日向区の安部登行政区長。町社協の職員も出席した。

このなかで、5の2区自治会長の中澤さんは、昨年9月以降に六軒町裏団地で取り組んだ交流事業を報告。まず、入居開始の時期に合わせて周辺住民と共同

で団地敷地内緑地の除草活動をを行うこととし、戸別訪問を行って参加を促した。続いて10、12月に芋煮会や懇談会を開催、入居者同士や地域住民との交流を推し進めた。こうした活動の準備は、入居開始の半年ほど前から始めている。活動内容は、みなし仮設住宅の入居者支援の経験を踏まえて決めた。

中澤さんは、「町民は心配いらないと思うが、遠方からの避難者は、孤立しないようしっかりと支援すべき。永住を決意してくれた人たちが失望させてはならない。早く町に溶け込んでもらうために、われわれの側から積極的に交流の働きかけを行うことが重要だ」と指摘する。

被災者が溶け込みやすい地域づくりは、誰にとっても住みよい地域へとつながっていくはず。また、自治会や住民による自発的、主体的な取り組みは、被災者に地域の一員としての自覚を促し、自立をあと押しする力となるに違いない。**木**

## まちデータ

### 宮城県涌谷町

涌谷町は、県北部内陸に位置、東側で石巻市に接する。人口は、

2015年1月末時点で1万7155人(5975世帯)。高齢化率は29.6%。

東日本大震災では、震度6強の強い揺れに見舞われ、死者1人、家屋全半壊879戸などの被害を受けた(県危機対策課まとめ)。

プレハブ型の仮設住宅はなく、町営住宅の空き家と民間アパートなどが、賃貸住宅借り上げ方式の仮設住宅、いわゆる「みなし仮設住宅」として利用されている。1

月末時点でみなし仮設住宅に暮らす人は、93世帯201人。うち町内被災者は34世帯58人で、残り59世帯143人が、気仙沼市、石巻市、東松島市、女川町など沿岸市町からの避難者。一部、登米市など内陸部や岩手県大船渡市など県外からの避難者もいる。

町営・民間別に入居状況を見ると、町営が32世帯54人で、うち町内被災者は20世帯30人。65歳以上は22人で全体の41%。民間は61世帯147人で、8割近い47世帯119人が、沿岸部などからの避難者。高齢者の割合は不明。

町から沿岸部へは、アクセスが良い(国道108号石巻街道、JR石巻線が町内を通る)。沿岸部に職場を持ちながら町内に定住する人も出てきている。

災害公営住宅は、3か所に計48戸。うち1か所8戸は昨年9月に、残りの40戸は今年4月以降に入居開始。48戸のうち35戸は、町外からの避難者が入居する見通し(1月末時点推定)。

東日本大震災  
あつちの地域の元気興し

第2回  
いがす大賞  
IGASU  
AWARD

支え合い

# S-1 グランプリ 第2回 いがす大賞

東日本大震災の被災地をいきいきとした輝きで彩るお茶会やサークル活動、まちおこしなどの取り組みを顕彰する「S・1グランプリ」第2回いがす大賞（実行委員会主催）が2月15日、せんだいメディアテーク（宮城県仙台市青葉区）で開かれた。「S」は「支え合い」の頭文字、「いがす」は「いいね」「了解」といった意味の方言から取った。「イカす」（素敵、かっこいい）にもかけている。

被災地では、住民同士が交流し支え合うさまざまな活動が行われている。そのなかには、地域づくりの優れたヒントがたくさんある。同グランプリの狙いは、そうした活動を掘り起し、称え、広く発信することだ。

応募者、入賞者の「いがす」アイデアと実践を、今号から連載形式で紹介していく。

## 観客も審査・交流に参加

S・1グランプリには、岩手・宮城・福島の被災3県を中心に全国から計33件の応募があった。このうち9件（9団体）が書類選考で入選、2月15日の本選に出場した。

見事大賞の栄冠を得たのは、福島県二本松市の「おわたいら大平北部ネットワーク」（次ページに記事）。準大賞には、岩手県陸前高田市の「北限の茶を守る気仙茶の会」が選ばれた（次号に記事掲載予定）。両者にはそれぞれ賞金10万円、3万円と表彰状が贈られた。

本選会場となったせんだいメディアテーク1階のオープンスクエアには、およそ200人の観客が詰めかけ、入選者による取り組み内容の発表を見守った。

発表は、大型スクリーンを使った写真や動画による活動紹介のほか、実演も行われた。ファッションショーや寸劇、踊りを披露する団体もあって、観客席からは盛んな拍手と声援が送られた。

審査は、審査委員による採点と、観客の反応の2段階で行われた。

審査委員の採点は、①

② おおほほ度（特徴や思いが表現されている）③ おもせ度（内容がおもしろい）④ のさる度（誰でも気軽に参加できるノリの良さ）⑤ おがる度（発展性）⑥ いがす度（直観に訴える魅力）——を基準とした。

観客には、「いがす」専用うちわが配られた。専用うちわが配られた。観客に入った発表や活動があれば、うちわを振って応援の意思を示す。うちわがどの程度振られたかが、審査の加点要素となった。

審査発表と表彰式のあとは、出場者、観客、審査委員らが自由に交流する時間が設けられ、こちらも多く参加者でにぎわった。



「S・Iグランプリ」第2回いがす大賞」で栄える大賞に輝いたのは、福島県二本松市で活動する「大平北部ネットワーク」。休耕田を活用した

地域づくりに取り組んでいる。

大平北部ネットワークは、100人ほどの有志者によって、2007年の春に設立。農業者の高齢化、後継者不足による、農業施設の維持管理や将来の地域環境に関する問題意識から立ち上がった。

設立後、農業施設の維持管理のために、用排水路の設置や改修工事、農道の砂利敷きなどを自力で行った。地域

づくりへのアプローチとして、花壇整備、生き物調査、水質調査、休耕田の再活用などにも取り組んできた。

休耕田の活用は、「田んぼの楽校」と称され、09年5月から実施。観光施設「安達ヶ原ふるさと村」に隣接する休耕田をよみがえらせ、景観を確保

した。

地元の小学生とともに、田植え、稲刈り、自然乾燥、脱穀などを昔ながらの方法で行う。収穫祭では、精米したもち米をせいろで蒸かし、杵と臼でもちをつく。

11年3月、震災や原発事故により生活環境が激変。子どもたちの野外活動自粛もあり、活動が危ぶまれた。

浪江町から二本松市に避難してきた人たちの理解と協力を得て、田んぼの楽校は同年に活動を再開した。浪江町から移り住んでいる人たちも事業に加わり、今年度の収穫祭では、もちや郷土料理のざくざく汁500人分を無料でふるまった。

一連の共同作業を通じて、老若男女、さまざまな人たちが収穫の喜びを分かち合った。同時に、浪江町の人たちは、二本松市で新たなコミュニティを形成することができた。

### 受賞理由

立場や思いを超えて、内陸部の人と沿岸部の人と一緒に活動するとともに、それを多くの人に伝える取り組みに感動しました。この活動を、県内一円、さらには全国に広げるべく、これを称え賞します。

「浪江町も二本松市も、震災や原発事故などにより、二重三重の苦しみを背負っている。そういう者どうしが、前に進もう、前に進もうという気持ちで活動している」と代表の浅川吉寿さんは語る。

S・Iでは、田んぼの楽校の米でつくられたもちが、審査委員や観客にふるまわれた。そのもちは、二本松市と浪江町の人たちの、苦楽をともにする支え合いの象徴のひとつとして堪能された。

清



DATA

社会福祉法人  
一関市社会福祉協議会

〒021-0887

岩手県一関市内1-36

一関市総合福祉センター

TEL 0191-23-6020

FAX 0191-23-6024

URL <http://www.ichinoseki-shakyo.com>

24回目

市民リレー

# 東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

## 心も体もあつたまる 温泉交流会に避難者69人

©社会福祉法人一関市社会福祉協議会



参加者同士まずは自己紹介



沿岸自治体の社協職員が踊りを披露



沿岸被災地で回収された写真の返却会も

岩手県一関市で避難生活を送る被災者が、市内の温泉で食事や入浴、レクリエーションなどを楽しみながら親交を深め合う「日帰り温泉交流会」が、2月11日開かれ、岩手・宮城両県沿岸部などからの避難者69人が参加した。主催は、一関市社会福祉協議会。

温泉交流会は、一関市社協が毎月1回開く「ふるさとお茶っこ交流会」の特別企画で、年に1回、同市厳美町の温泉旅館で開かれる。今回が3回目。市内各地を発着する送迎バスが運行され、足の不自由な人や自家用車を持たない人も参加しやすい。このため、年に1度の交流会を楽しみにしている人が多い。沿岸自治体の社協の生活支援相談員らも出席することから、避難者と郷里の支援者がつながる貴重な場にもなっている。

参加は2度目という気仙沼市出身の女性（75歳）は、「ここには故郷の人が大勢集まるからいいですね。温泉にも入れるし、おいしい食事もいただけるので、（開催を）楽しみにしています」

と笑顔を見せる。参加者は、気仙沼市の出身者が42人で最も多く、以下、陸前高田市18人、大船渡市4人、仙台市2人、石巻市・宮古市・山田町が各1人と続く。

市外からの避難者数は、2月1日時点で604世帯1234人。このうち、気仙沼市から427世帯854人、陸前高田市からは73世帯151人が避難し、この2市で全体の8割以上を占める。気仙沼市の避難者が多いのは、同市の被災者向け仮設住宅が、一関市内2地区に計320戸あることも大きい（入居190戸256人※2月1日時点）。

一関市社協の地域福祉課長・菅原敏さんは、「お茶っこ交流会をきっかけに避難者同士のつながりができ、移動や買い物で助け合ったり、趣味のサークルを結成するなどの動きが広がってきました。支え合いは、まず仲間づくりからです。今後交流の創出には力を注ぎたい」と語る。交流会などの避難者支援は、今年度も継続する予定だ。



## サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

### スーパー公務員!?

春になると、世の中の雰囲気も明るくなるのは北国ならではの想いです。とは言え、人事異動で、せっかく関係性ができていた人財との別れは、仕事上のことを超えて、残念に思うことがよくあります。

この春、忘れられない人財との別れがありました。「お役人」にしては生臭いところに拘っていた方です。震災復興のため仙台に単身赴任で来られ、市町やサポートセンター、NPOなど多くの人たちとフラットな関係を意識された仕事ぶりは、GOODでした。

声をかけると、どこにでも行動をともし、被災地の「今」を共有してくれました。基本、私は「お役人」という人種は苦手です。関係性をどのように築いたらよいか、と面倒くさいことを気にしたくないからです(失礼)。けれど、この人と接して、「お役人」も同じ人間であったと再認識。言わせてもらえば「いい奴」でした。スーパー公務員というイジリ(?)にもめげずに、サポセンの従事者を支えることにご尽力いただきました。まだ道半ばなので、戻られると困るのですが、単身赴任が続くことで、家庭内に私同様「居場所」がなくなるとかわいそうなので、勘弁してやります。

復興に向けての取り組みが遅々として進まない実感をもつ者として、特にハードよりソフト面での整備の遅れが気になっています。

それゆえ、現場の声を政策的に反映する役割を担う存在の責任は重大です。現場から突き上げられながらも、施策に反映していくことを厭わなかった姿勢に感謝しています。そして、飲むと面倒くささが顕著であったことが懐かしく思い出されます。なので、忘年会には必ず出席の命を下しています。よろしく。

## ひとりごと

サポーターのあなたへ



宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上 章

### 人間を・住民をどう観るか? ② ～「住民主体」と「地域福祉」の視点から～

住民を地域で暮らす一人の生活者、人生の主人公、力を内在する“主体者”として観ることの大切さを、前回書きました。

私は、長い間、ある市の社会福祉協議会(以下、社協)の福祉活動専門員として勤務しました。社協は、民間の立場から地域福祉を推進するという社会的使命を持った専門機関です。そして社協には、“住民参加・住民主体”とい活動原則(理念)があります。私が、32年間という長きにわたり社協に勤務できたのは、組織が掲げる崇高な使命と“住民参加・住民主体”という活動原則の魅力に心底惚れていたからだといっても過言ではありません。

福祉の仕事は、人の幸せを願って行うものです。人は、誰もが心の深いところで「幸せに生きたい」「人間らしく生きたい」「より良く生きたい」と願って生きていると思います。私の場合は、人間らしく生きたい。人生の最後まで主体的に、生き生きと生きたい。との思いが強くありました。

そのことを障がいを持つ人や高齢の人など何らかのハンディを抱える人に置き換えて、地域の誰もが「住み慣れた地域で人間らしく、生き生きと暮らせることができる地域づくり」が、仕事でも地域でも目指す目標としていました。

そうした地域づくりを行う主体は、そこに住む住民自身であり、住民の活動をサポートしていくのが社協や行政、NPOなどの組織の役割だと思います。

コミュニティが弱くなった被災地や高齢者、単身世帯が多い災害公営住宅や地域で、どうすれば住民主体の支え合い活動ができるのか? 乗り越えていく施策をみんなで考えていく必要があります。

東日本大震災から4年が経過したが、全国には約22万9千人もの避難者がある。そのなかには、福島第一原発事故の影響による避難者が含まれる。「栃木避難者母の会」は、栃木県内に避難してきた母親2人が、2013年春に立ち上げた。

強制避難か自主避難かで分けられ、さらに強制避難地域での区域編成や自主避難での放射能への感受性により、多様に立場を分けられがちな原発避難者は、各家庭・個人の問題とみなされ、孤立しやすい。故郷を失った喪失感や悔しさ、復興政策に対する違和感などの思いを吐き出す場もない。そこで、当事者同士で思いを共有すると



もに、自分たちの思いを栃木県の人に知ってもらう交流会や、福島県で暮らす人と自分たちが相互理解するための「栃木県福島県おたがい様交流会」などを定期的に開催してきた。

メンバーの大山香さんは2児の母。自宅のある福島市から、夫の通勤の便を考えて宇都宮市に家族で避難してきたが、先の見えない暮らしに孤立感と自己責任の重圧を感じた。そんな中、避難者支援を行う「とちぎ暮らし応援会」の訪問支援員募集を知り、2012年6月から2014年3月まで訪問支援員として活動した。故郷の避難者を訪ねるなかで、高齢者が日々弱っていく姿や、自主避難の母親たちの苦悩を知り、本気で何とかしなければならぬと思ったことが、当事者目線での会の立ち上げにつながった。開設したブログをとおして、避難者登録をしていなかった人たちが交流会に参加し、互いの悩みが共通していることに気づくことができた。「悩んでいるのはあなただけじゃない」ということを同じ境遇の人たちに届けた

いと考へ、「母の会新聞」も発行。避難者同士、栃木の支援者同士がつながり、信頼関係を築けたことは大きな財産だと、大山さんは話す。

今年3月には、宇都宮大学国際学部付属多文化公共圏センターの福島乳幼児・妊産婦支援プロジェクト(FSP)とともに、福島県から栃木県への避難記録の証言集『原発避難を語る』を発行。避難を続ける人、地元に戻った人、それぞれの当事者が抱える問題が個別化し、深刻化している様子を社会に発信する。「発足時の目標だった2年間の活動ができました。今後もできる範囲で続けていきたい」と話す大山さん。当事者の経験と切実な思いが、未来に活かされることを切に願う。

DATA

栃木避難者母の会  
ブログ

<http://ameblo.jp/tochiginan/>  
『原発避難を語る』は非売品ですが、先着2名様まで、送料300円負担で希望者にお譲りします。希望者は編集委員会 022-727-8730までお問い合わせください。

☆次号予告 特集「みんなの『たまり場』をつくる・見つける」

購読者を募集しています!

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか?

購読会員 年3,696円(年12回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座  
口座番号: 02260-9-46303  
加入者名: 全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、  
①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み  
を記入してください。



読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

「地域包括ケア」という言葉を耳にするようになってきましたが、それがどのようなものなのか、あまりよくわかりませんでした。30号の地域包括ケアに関する記事を読んで、以前よりも具体的なイメージができるようになりました。自分の住む地域の包括ケアについても、調べてみようかなと思います。(仙台市宮城野区 S・S)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!  
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737  
E-mail joh@clc-japan.com

【おわびと訂正】

本紙31号16ページに掲載した「岩沼市復興支援センタースマイル」(宮城県岩沼市)の記事中、地図の表示位置が誤って宮城県北東部の「女川町」になっていました。正しくは同県南東部の「岩沼市」です。お詫びして訂正します。